

記念講演

青空は青いまままで 子どもに伝えたい九条の平和な21世紀を

東京大学大学院教授・「九条の会」事務局長

小森陽一さん



憲法をめぐる問題と子育て

私の母が作詞した「青い空は」は、それまで原水爆禁止運動をやっている人たちが共通して歌える歌は「ああ、許すマジ原爆を」でしたが、これはあまりにも暗く、もっと前向きに核廃絶の運動をしていく、何よりも子ども達や孫が生きる時代には核兵器を無くす、という思いが伝えられないかと、この歌が生まれたと聞きました。ちょうど私が大学に進学する頃から、集会で歌われるようになったようです。ですから当時は、学校でも小森香子きょうこさんの息子さんと言われ、ようやく最近きんは小森陽一さんのお母さんですか(笑い)と認知されるようになりました。母の力は偉大ですね。

今日は子ども達の言語習得にとって、「なぜ」という問いがどれだけ大事なのか、いま私たちが現実を生きていく上で、3歳児が抱く「なぜ」という根元的な問いが大事になっていくというお話をしたい。つまりいま私たちが直面している、憲法をめぐる問題と子育てとがどれだけ深く結びついているか、ということをお話させていただこうと思います。

今年のヒロシマ・ナガサキの日は、日本国中にどう受けとめられたかという問題をふり返っていただきたいと思います。通常の年であれば、テレビのワイドショーは、15分か20分程度のワクで、ヒロシマ・ナガサキの日のことを報道するのが、今年は5分足らずでした。なぜそうなったのかということはみなさんお気づきのことでしょう。これに気付いていないと権力者にだまされるんですね。

ワイドショーと世論操作

テレビのワイドショーを使って、国民の世論を操作する国になったのが、小泉純一郎氏(以下敬称略)が総裁選に立候補した時からです。テレビのワイドショーでよくアヒルに出会うでしょう。アフラック(Aflac)という、最近ネコも出ている、あれはアメリカの生命保険会社ですね。アメリカの金融機関の大御所です。ワイドショーの最初のワクはアリコで、すべての民放が買っているでしょう。地井武男も出ていますね。アメリカンダイレクトもアリコと同じAIGです。これは去年の世界金融恐慌の時に、リーマン・ブラザーズと一緒にコケたんですね。アメリカ国民の税金を投入して救済したでしょう。なぜリーマ

ン・ブラザーズはうち捨てて、AIGグループを救済したか、日本では生命保険、ガン保険、医療保険という顔しか見せていませんが、AIGグループの一番大きな事業収入はアメリカ軍の保険なのです。アメリカ軍の将校がイラクに行ったり、イージス艦が危険な地域に行った時のリスクの値段はいくらという、そういう商売ができるグループです。だからもしAIGグループがつぶれてしまったら、アメリカの軍の機密が全部暴露されてしまうからです。

もう一つ一番大きなところはサブプライムローン問題も含めて、世界中の金融機関が極めてリスクの高い金融商品の取引をしています。保険というのはリスクに掛けるわけですから、例えば火災保険とか、地震保険とか、何かリスクが起きた時にそれを担保するというのが保険です。危険な金融取引、これは90年代のいわゆる金融ビッグバンで、規制緩和されて詐欺まがいの金融商品が売り出されるようになっていきます。

その保険を担保にして、世界中の金融機関の損失補てんの保険を担当していたから、AIGグループがつぶれたら世界の金融機関が全部つぶれてしまう。だからアメリカは国民の税金を投入したんです。金融機関が税金を吸い取ってまた生き延びている。世界金融恐慌の後から振り返ると、なぜ2005年に小泉純一郎が総理大臣の首を掛けて、郵政民営化「イエスカノーカ」と衆議院で3分の2の議席数を取ったのかがお分かりでしょう。

去年の金融恐慌というのは、サブプライム

ローン問題でしたね。アメリカの低所得者に、最初の数年間は返済するお金は少なくてもいいと、動産を買うお金を貸して、何年かたったら一気に返済額が上がるローンです。不動産の借入金がこげ付いたら、大きな金融機関も証券会社も全部つぶれてしまうという教訓は、日本の 90 年代始めのバブル崩壊で明らかでしたね。そこで直接、銀行が借入金の損失を補てんしなくてもいいようにしたのがサブプライムローンです。

もともとは借金のかたにすぎないものを、金融工学という詐欺の学問でいろいろ計算したものです。お金持ちがお金を借りると確実に返すからリスクが少ない。貧乏人が借りるとリスクが高い。このリスクを計算して作ったこの金融商品はローリスク・ローリターンとして全世界に売り出した、これがいわゆる金融規制緩和です。

郵政民営化のねらい

みなさんも郵便貯金を持っていたでしょう。いま過去形で語らなければならないように郵貯銀行になりました。私も持っていました。私は 1965 年まで父親の仕事でチェコのプラハにいました。日本に帰ってきてお正月に、一緒に住んでいた父方の祖父と近くに住む母方のおばからもらったのし袋に入っていたのは、小学 6 年生の僕にとっては巨額な紙幣でした。お年玉を知らなかったんです。月極めのお小遣いだったら豚の貯金箱で安心ですが、高額紙幣だったので祖母に相談したら、真顔になって銀行は取り付け騒ぎになると預金がなくなるか止めなさい

と言われました。何の話かといったら、1929 年、いまから 80 年前の世界恐慌の時、日本も銀行で取り付け騒ぎが起こり、小森家の財産が消えてしまった。その時のことはまだ生々しく祖母が覚えていたのです。これで日本の庶民は、安全なのは郵便局の貯金だと学んだのです。

小泉純一郎が郵政民営化をする時、ホリエモンがガッポガッポ金融商品で儲けている時で、“郵政省に預けていたらタンス預金です。こんなもったいないことは止めて、民営化して民間に預けて有効活用しよう”と言ったんですよ。あれがいかにかましの言葉だったかということです。タンス貯金だから安全だったんです。なぜ郵貯問題で簡保の宿が 1 万円で売って 6 千万円で転売されたという、不動産がらみのことが問題になったかということ、郵便貯金と簡易保険の溜りに溜まったお金は、不動産売買ぐらいにしか使えなかったからです。金融取引ができなかったんです。

つまり郵便貯金は、90 年代に金融規制緩和をやって、いままでの世界恐慌の教訓があったから、庶民が預金をしている銀行は危険な金融商品取引してはいけない、お金が余っても普通に儲けられればいいというスタンスだったのです。ギャンブルしたい人はうちの銀行に預けなさいと、いまでも名前だけは三菱 UFJ 銀行と三菱 UFJ 信託銀行というのがあるでしょう。信託のほうは危険な金融商品をやっても損してもかまわない、普通の銀行はやってはいけない。これを全部金融の規制緩和でやれるようにしたの

です。

アメリカがサブプライムローンで低所得者に不動産を買わせることを規制緩和でやりました。一斉にみんなが高い返済額を払わなければならない日がくるんですよ。これが2004年の12月だった。小泉郵政民営化選挙をやったのが2005年9月11日ですが、6月にはアメリカの住宅額は崩壊していたんです。一斉に低所得者が買って、一斉にローンの返済が高くなると払えなくなるから、一斉に家を手放すでしょう。そうすると供給過剰で買う人がいないから破たんするしかなくホームレスになる。これが2005年に起きていたんですよ。全世界の金融機関にサブプライムローンのウイルスで感染したお金が散らばっていたわけです。金融機関のお金は額面どおりではなくなりました。

額面どおりのお金は日本の郵便貯金と簡易保険しか世界中にはなかったんです、あの時。みなさんの貯金ですよ。それを小泉純一郎と竹中平蔵はアメリカの金融機関を助けるためにあげてしまった。郵便貯金・簡易保険の郵政は自民党の支持基盤であったから、自民党の総理大臣は手をつけなかった。2001年、誰もが小泉純一郎が総理大臣になるなんて思っていなかったでしょう。巨大な田中派をバックにした橋本龍太郎だと思っていた。

この時、日本のワイドショーのスポンサーがみんなアメリカの金融機関だったんです。駅頭で小泉純一郎が演説すると、動員された段階の世代の女性たちが、叫び声をヨン様のように上げていた。あれを毎日流してい

たら、自民党の総裁選なのに、国民の代表選のような雰囲気になってしまった。誰も小泉純一郎なんて知らなかったんですよ。彼だけが自民党の中でアメリカのために郵政民営化をすると公約していた。

なぜ橋本龍太郎ではだめだったのかというと、外国人記者クラブで橋本龍太郎が講演した時、質問で「あなたは何回も大蔵大臣をしたが、最近では中国もロシアも経済力をつけてきて、いろいろな国の国債を買ったり売ったりしている。通常はその国の信用が低い時は、国債の値段は安いから買って、その国の企業が伸びて信用が高くなったら売り、差額で儲ける。不思議なことに日本はアメリカの赤字国債、しかもアメリカの貿易赤字と国家財政の赤字(双子の赤字)を、つまり絶対に借金を返せそうもない国の赤字国債をずっと買い続け一度も売っていない。何か特別な理由があるのか」と質問しました。鋭い質問です。橋本龍太郎は日本語で“私だって売りたいという願望にかられないことはないわけではない”と答えた。三重否定です。通訳は面倒くさくて“売りたい”と訳した。これで橋本龍太郎の政治生命が終わったんです。

日本の税金で補てんする

一国の総理大臣が売りたいと思っても、日本がずっと買い続けているアメリカの赤字国債を売ることは許されていない。なぜならば、いま結んでいる日米安全保障条約、これは安倍晋三の母方の祖父、岸信介が1960年にアメリカが核の傘で日本をソ連の

核の脅威から守ってやるから、日本はその見返りに毎年アメリカの経済要求を聞きなさい、という軍事同盟と経済同盟が抱き合わせになっている。だから毎年アメリカから、今年はいくらアメリカの赤字国債を買えそうかと、日本国民の税金でアメリカの赤字国債を買わなければいけない。アメリカの国家財政のかなりの分は日本国民の税金でまかなわれているんです。

みなさんの税金で AIU グループ(アメリカの保険会社)は救われたんですよ。いかに日米安全保障条約は、国民にとって損失しかもたらさないか、昨日、赤字国債の総額が出たでしょう。去年を大幅に上回って1兆数千ドルですよ。1兆数千ドル×100、いま日本の国家予算は95兆円です。日本の国家予算の全体よりアメリカの赤字国債は高いんですよ。

この橋本龍太郎を絶対日本の総理大臣にしてはいけないということで、日本のワイドショーをアメリカの生命保険会社つまり金融機関が買い取って、小泉純一郎の大応援をしたのです。それで念願の郵政民営化をやったんですよ。このように私たちの目の前で起きている、いろんなことに対して、なぜという問いを立てないと騙されっぱなしになってしまいます。

ワイドショーとメディアジャック

もう一度言います。今年の広島・長崎の原爆の日は、ワイドショーで何を報道しましたか。すべて酒井法子だったでしょう。Nルピ一報道で埋め尽くされたんですよ。完全に

メディア・ハイジャックです。8月4日、クリントン元大統領が北朝鮮の金正日きまじょうにんと会談し、恩赦で2人のテレビ局記者を解放し、アメリカに連れて帰ったという電撃報道が外務省に入りました。クリントンの北朝鮮訪問はアジア的な問題で、酒井法子は中国や台湾・韓国にとって、日本の大衆文化の大使のような役割をずっと果していたスターだったでしょう。だから完全に上海も広東も台北もソウルも日本も、8月4日の大衆紙の一面は酒井法子です。

なぜクリントンが北朝鮮を訪朝したことをアジア全体で隠さなければならなかったかということ、オバマ大統領が核廃絶を初めて世界によびかけ「アメリカが核兵器を使用した唯一の国」だと言ったことは、オバマ大統領の北朝鮮政策が転換するという決定的な事件だったのです。日本のワイドショーは北朝鮮問題は大好きです。酒井法子問題がなければ、ガツーンと報道されていたんですよ。

1994年6月16日、今の金正日のお父さんの金日成きむいるそんの時代に第一次北朝鮮核開発危機が起きた時、その問題を収めるために当時のクリントン大統領を特使として送ったのがカーター元大統領です。この時の金日成との約束で「米ソ枠組み合意」というのが決まっています。北朝鮮が核開発をしない代わりに、アメリカが毎年50万トンの重油を北朝鮮に提供するという。これは91年にソ連が崩壊したので、ソ連からの輸入が途絶え、北朝鮮の住民が凍死するという事態が92～93年の冬に起きたんですよ。

2003年までに原子力発電所をプレゼントするという約束をしました。

この時期に何が起きたか覚えていますか。日本の総選挙です。マスメディアが初めての政権交代選挙と言いましたが、あれは真っ赤な嘘で一度交代しているんです。93年に自民党単独政権が崩壊しています。小沢一郎が新生党を作って自民党から出た。鳩山由紀夫や竹村正義を立てた新党さきがけを作った。この二人の策略で自民党が分裂して7月の総選挙で自民党が大敗し、小沢一郎の手腕で反自民非共産の7党1会派連立の細川^{もりひろ}護熙政権が出来たのが1993年8月でした。

この細川政権が突然離任したのが1994年7月8日です。これがいま言った北朝鮮核開発危機です。北朝鮮の労働党と細川政権の与党であった日本社会党は友党だったからです。第二次朝鮮戦争が勃発という危機をクリントンが巻き起こし、この戦争に協力しろというのを細川^{もりひろ}護熙は断ったので、佐川急便事件を暴露してもいいかと脅され、細川は翌日辞任したのです。

でも当時は誰も知らなかった。訳が分からない辞任だったんです。金日成の時に起こったと同じ記事が、2002年ブッシュ二世大統領が北朝鮮をテロ支援国家に指定する。だから北朝鮮は日本に頼るしかなくて、外務省の田中均アジア局長を橋渡しに小泉純一郎の突然の訪朝を企てた。そのことがほぼ明らかになった2002年、『正論』という右翼雑誌に“細川政権崩壊は北朝鮮有事だった”という論文を書いたのが、その後

権力の中枢にすり寄っていく小池百合子議員です。

いま民主党の幹事長は小沢一郎で、鳩山一郎が総理大臣でしょう。だから94年の記憶をみんながよみがえらせたらずい、というのが権力の判断です。細川^{もりひろ}護熙が辞任した後、小沢一郎が自ら立てた新生党の党首で、羽田^{は たつお}孜を総理大臣にして予算だけ通そうとしたんです。しかしこの時第二次朝鮮戦争勃発という危機でしたから、日本社会党と新党さきがけは政権を離脱して少数与党になるのです。

94年6月16日にカーターが行って危機が回避されました。自民党は何をやったかという、55年体制で宿敵だった日本社会党の村山富市委員長を総理大臣に立て、新党さきがけを巻き込んで自民党がもう一度政権に返り咲いたのが94年の6月30日です。社会党は第二次朝鮮戦争の危機が回避されたから乗ったんですね。

7月8日カーター元大統領と約束した金日成が突然死亡しました。その後、金正日が主席になったら、クリントンがいきなり息子があとを継ぐなんて世襲の独裁制は許さないと行ってこの約束を^{ほご}反古にし、7月10日にもう一度第二次朝鮮戦争勃発の危機になりました。だから小沢一郎の差し金で新生党の議員が村山富市に公開質問し、村山富市は自衛隊合憲・日米安保条約堅持という180度の転換をしたので、社会党が分裂し日本の平和運動も分裂しました。だから社民党が今度の民主党の連立政権に入るとかもめたのは、社民党に村山富市トラウマ

があるとメディアは報道しました。

過去の出来事を思い起こす

情報操作に惑わされないために

2000年代は90年代を反復しています。私たちは神様じゃない、でも人間は推理する能力を持っているのが、おでこの真ん中にある人間の脳皮質と前頭前野です。いま起きていることと過去に起きたことが似ていけば、過去に起きたことがどのように推移したか、その記憶をよみがえらせば、いま起きていることにどう対処するか判断できます。一人ひとりの有権者が、主権者としての国民が、いま目の前に起きていることに対して、「なぜ」という過去の出来事を思い起こしながら考えていく、これが権力の情報操作に惑わされないポイントなのです。

93～94年、日本の世論は憲法を変えたほうが良いということになっています。読売新聞は毎年7月の第1週に憲法世論調査を行います。2008年の7月の発表では、15年ぶりに「憲法は変えないほうが良い」が、変えたほうが良いという人を上回りました。1993年から読売新聞が憲法世論調査をすると「変えたほうが良い」という人が多数派だった。なぜか、それは自民党の幹事長だった小沢一郎が湾岸戦争の時から、「九条があるから自衛隊を海外に派遣できなくて国際貢献が出来ない、九条を変えて国際貢献をする普通の国へ」というキャンペーンをずっと張っていたんです。小沢一郎こそが、それまで憲法違反だといわれていた海外派遣に道を開いた自民党の幹事長だったんで

すよ。このところを間違えてはいけないうすね。

人間の脳と前頭前野

では「なぜ」という問いを私たちがきちんと持つためにはどういう力が必要か、そのことが私たち人間が言葉を操る生き物であるということと深く関わっていると同時にいまの子育ての大事なところなんです。人間はいつから「なぜ」という問い(結果に対して原因や理由を尋ねる問いのこと)を発するかというと3歳からです。3歳児になると人間は言葉とどうつきあっているのか、この十数年間脳科学が発達しましたから、どういう作業をやっている時に人間のどの脳が働いているのかがわかるようになりました。脳皮質の一番前のところが「なぜ」という問いを立てて推理をする前頭前野というところですが、ここを使うようになるのはいつからかということをお話します。

胎児は記憶を持っている

最近の新生児教育で明らかになったことは、人間のあかちゃんはお母さんのお腹にいる時から記憶を持っているということです。ことばは記憶と不可分なのです。妊娠8か月位前から記憶が形成されます。記憶は基本的に五感で外界と関わることから積み重ねられます。あかちゃんの五感はどうなっているかという、触覚・触覚はお母さんの羊水の中でぬるま湯に浸かっている感じです。

あかちゃんが生まれたらすぐ産湯につけるのは、生まれてくる時にパニックになって

いるあかちゃんに、さっきまでいたお母さんのお腹の中の記憶をよみがえらせ安心してもらうためです。汚いから洗うということではないのです。日本は水が豊富ですから産湯ですが、砂漠の民はしばりたてのラクダの乳の中に付けて産湯を使わせているのです。産湯は全世界共通です。

胎児の視覚はどうかというと真っ暗ではありません。血管をとおして太陽光線が入ってきているから、赤い色がずっと見えているのです。だから目が開いたばかりのあかちゃんにアカンベーをしたり、赤いものを見せると喜ぶでしょう。あれは体内の記憶がよみがえってくるからです。

味覚はお母さんの羊水が口に入っていますから、薄しょっぱい海の水と同じ成分の味です。だからお母さんのおっぱいも羊水と同じ味です。あかちゃんは生まれてすぐおっぱいをくっつけた時から、すばすば吸うのは味覚の記憶があるからです。だから日本の伝統的な和食を食べているのが一番羊水に近い濃度のおっぱいになります。

触覚、視覚、味覚、嗅覚は息を吸っていないからありません。聴覚はお母さんのお腹の中で聞いています。妊娠中の夫婦の対話やお父さんの声も聞いています。おじいちゃんやおばあちゃん、きょうだいの家族の声を聞いています。だからあかちゃんを安心させるために大事なことは話して声かけをすることです。どちらかの耳がお母さんの体について、胎内で聞いた同じ回路で声が聞えてくるようです。だからおっぱいを飲んでい

う。お母さんの心臓の音を聞いて安心をする。ずっとお腹の中で聞いていたから。

さっき太鼓を聞いたでしょう。なぜ太鼓のリズムは気持ちがいいのか、それはいちばん根源の胎内のお母さんの心臓の記憶をよみがえらせるからです。人間は生まれてくる時、頭蓋骨はしまっていないんです。柔らかくないとお母さんの骨盤をこじ開けて出てくるので、頭蓋骨を締め付けられるような痛みです。場合によっては7時間から8時間も引っかかったままでしょう。人間は人の死は経験できるけど自分の死は経験できない。でもなぜ死ぬということが分かるのかというと、生まれてくる時に死ぬかもしれないという経験をしているからです。

「オギャー」というよびかけ

頭蓋骨を締め付けられる痛みの中を数時間、その後、何も入ったことのない肺細胞の中に1気圧の酸素が入ってきて、初めての吐息がオギャーという産声ですよね。その産声の中にあかちゃんはどんな思いを込めているか、それは全身全霊で“私を助けて!”と言っている。あかちゃんはこのオギャーという産声を周りの“声を出している人”に向けて発しているということが新生児医学でわかりました。

自分を助けてくれる人は、自分の周りに立って声を出している人。だからゼロ歳児は自分のそばの肉体として存在している人の声に、人間の言語として反応する。機械からの音には反応しません。1歳児までは自分のそばの肉体が発するどんな国の言語でも、

それを人間の言語として言語脳で処理するのです。つまり自分でことばを操るまでは、すべてのことばに開かれているのです。

あかちゃんがオギャーと泣くのはピンチの時です。お腹が空いたらオギャーと泣き、おしっこをしたらオギャーと泣く。このオギャーと言う声に、よしよしい子ねと大人が声をかけることによって、あかちゃんは生きていけるという実感を持つのです。生きる実感や生きていけるという実感は、オギャーと泣いた時にどれだけすぐ周りの大人が声かけをしてだっこをしてくれるかということできまってくる。あかちゃんが泣いているのをほっとくと、狂ったように泣き叫び後は死んだような状態になってしまうでしょう。

人間とことばの獲得

人間がなぜことばを操る生き物になったかという、周りの協力を得ないと子育てが出来ないからです。社会的に子育てをするためにことばを持っているんです。猿のあかちゃんだって生まれて直ぐお母さんにしがみつくだしょう。人間のあかちゃんはことばを獲得しなければいけないから、そんなことはできないんですよ。それは大脳が未発達で生まれてくるからです。だからお母さん1人で子育てすることほど非人間的なことはないんです。

あかちゃんは周りの大人を自分の延長線だと考えている。自分と他人は分離していない、目が見え始めたあかちゃんは、ずっと自分の手を見て喜んでいるでしょう。あれは自分の手が他人だからですよ。遊んでもらっ

ていると思っている。自分の脳から指令が行っていないんです。最初あかちゃんをお風呂に入れる時、濡らした手ぬぐいを腕に掛けるでしょう。お風呂に入るとお母さんのお腹の中を思い出すから、あかちゃんは幸せになって緊張がとけると手が動いてしまう。そうすると自分で驚いてパニック状態になってしまわないように濡れた手ぬぐいをかけてやる。

5か月たつと、それまでは周りの大人からの働きに対応してあかちゃんの体はまとまってきました。これを受動的受身の統合といいます。これが6か月になると、自分の脳から体に指令が速やかにいくようになり、自分の意思で体を動かせるようになる。これを身体の能動的統合といいます。寝返りを打ってハイハイをするようになると、周りのケアをしている大人から離れたところで行動をするようになる。離乳食が始まると、やたらと周りのものを口に入れる。

この頃を口唇期こうしんきといい、人間が精神的な傷を一番受けやすい最初の時期として位置づけました。それまでは周りの優しい声かけを受けていましたが、大人の制止や叱責の声に変わります。11か月頃になると、あかちゃんは大人の顔色を見ながら駆け引きをするようになる。この時期に大人とのアイコンタクトがとても大事なんです。あかちゃんは大人と目を合わせて、自分の行動を見守ってくれているか判断している。

そして1歳になるとつかまり立ちをして、離乳食もすすみ、よく咀嚼そしやくをして嚥下えんげすることによって、おっぱいを飲むあかちゃんの口

の形が変わってくる。その頃からことばを発する声を出せるようになります。日本の子どもの80%がマーマということばを発します。あかちゃんはことばの意味をわかっていません。五感を通してビデオテープで取ったように記憶に入れるんです。あなどっちゃいけませんよ。全部覚えているんですから。

1歳児というのは芸人の受けねらいと同じで、周りの大人が笑ってくれて、自分がいることを喜んでくれて生きていけると思えるんです。動物の中で人間しか笑いません。だから笑いの中にいるということが人間として受け入れられている証なんですよ。いま私がここで無理やり笑いをとっていることと同じなんです。

私も82年に長女が1歳のとき、東京に出てきました。ちょうどことばを習得しはじめ、夏でしたか15か月ぐらいの時、当時は中曽根康弘が総理大臣でした。私は大学の教師ですから、5時半頃から連れて帰って、夕食の支度をして6時頃夕食を食べて、7時のニュースを見てという生活をしていました。ある日、食事が終って、つれあいとビールを飲んで、ニュースを見ていて、中曽根康弘の写真が映ったら「キューダン」ということばを発したんです。私らの学生運動用語なんですね。そのことばを突然発したので私もつれあいも大笑いしました。あまりにも意外だったから。そうしたら長女は受けたと思って「キューダン、キューダン」と言うんです。寝かせてから、もう一度同じニュースが出て“最近中曽根康弘が出てくるたびに「キューダン」と言っていたわよ”とつれあいが言

うんです。

つまり大人たちがやっていることを覚えこんで、自分もやってみて受け入れられたらOK。エピソード記憶をベースにしながら同じことをやってみることを「手続き記憶」と言います。人間の体は手続き記憶で人間らしくなっていくのです。私たちが人間らしい体の動きをするのは、99%は自然ではなくて、生まれた後にしつけなどで、最初は意識的にやっていたあと無意識化するのです。

1歳児は1日に30単語くらい覚えていく。これは遺伝子に書き込まれた人間の言語習得ですね。ほっといてもことばを覚えていく能力を持っているのは5歳までです。その後は学習をしないと、そういう機会を特別に与えていかないと駄目です。だから7歳以降は学齢に達する学習になるのです。

5歳までの子どもがどれだけ豊かな言語環境の中におかれていくのかということが、人間力をつける上で決定的な勝負なのです。1歳児は単語を覚えていくわけですね。だからことばはバラバラです。だけど30か月経つ頃に、人間の子どもは文法を習得し、主語と述語をつなげられるようになる。これは周りの大人から見ると一人前になったと思うでしょう。

人間が生きていくためには、摂食と排泄が自力でできるかがかなめですから、そうすると周りの大人は排泄も自力でやらせようと、このあたりからおむつをとるしつけが入ります。これが第二期の人間にとっての精神的なショックです。

3歳児の「なぜ」が根源的な問い

「三つ子の魂百まで」といって、何で私たちは3歳時以降の記憶しかないかというと、3歳児までの記憶は使い物にならないから捨てなきゃいけないと、この時強く思うからです。だって排泄のしつけはどのようにするのですか。子どもにとっては180度世界が転換してしまうのですよ。これは子どもにとっても理不尽で不条理だということがわかるでしょう。だから性教育はオムツを取る時から必要なのです。男の子と女の子では処理が違うのだから。

排泄のしつけで精神的に圧迫感を与える時期を、フロイトは肛門期と名づけました。この頃から子どもは何かをためておきたくなる、いろんなものをコレクションするでしょう、あれはおしっこをためておかなければいけないという強迫観念があるからです。肛門期の排泄のしつけが、「なぜ」という根源的な問いを子どもが発するようになるのです。なぜという問いを発することが難しい人は、お前は人間じゃないと大人から切り捨てられてしまうという恐怖と、なぜという問いは私たちすべての人間の記憶の中で隣り合わせになっているのです。なぜという問いをいくらでも発していいんだよと、子どもたちに大人が開いていかなければ、自らなぜという問いを発して自分でものを考える人間には育っていかないんです。

「なぜ」という問いを子どもから問いかけられると、大人は行き詰ることが多いですね。私たちが日常的に使っていることばは、さほど責任持って使っていないから、子どもにつ

つこまれると、大人として面子^{めんづ}を失うんですよ。核家族化して忙しく働いている家庭ではそうなってしまいます。

子どもとことばの記憶

昭和30年代までは家や近所に子どもの好きなおじいさんおばあさんがいて昔話をしてくれた。口承伝承、言い伝えの世界、なぜという問いを大人に発しまくる3歳から5歳の子どもの達が、夜寝る前に“お話して、絵本読んで”とせがむでしょう。寝る前は子どもが不安になるのです。寝るということは仮死状態になるからです。どうしてお話をするとき子どもは安心するのか、どうしてお話や物語は人間にとって精神安定剤になるのか。

それは昔話の世界は、原因結果がきれいに並んで絶対変わらないからです。桃太郎の話はどこまでいっても桃太郎の話ですね。子どもは決して新しい面白い話を、ニュースとして聞きたいわけではない。同じ話を何度も何度も繰り返します。原因と結果の関係が1か月前の桃太郎の話と3か月前の話と今晚の桃太郎の話と変わっていないことを確認したいんです。あるところまで納得すると、「もういい」と桃太郎の話から卒業し、浦島太郎、かぐや姫へと卒業していきま。もういいとなった時は、この世界は変わらないんだと疑わない、そうすると完全に物語のパターンとして子どもは暗記します。そして暗記した物語のパターンにあわせて自分のことを話すようになります。誰々ちゃん

はね、と。これを私たちは自我とよんでいます。人

間がことばで記憶している自分のことなんです。他人と分離した自分というものを作り出していく。私たちが自分と知っていることは、周りから聞いてきた物語のことばによって、それを暗記してその型を自分のものにして、それにあてはめて自分のことを語るんです。最初は子どもにとってすべての出来事は全部初めてのことなんです。ゼロ歳児にとって遭遇することは、すべて生まれて始めてのことなんです。だから3歳から5才児のこどもがみんな悪いことをしたがるでしょう。当たり前ですよ。やったことがないんだもの。これは倫理的にいいか悪いかという話ではない。子どもは初めてのことには好奇心がある。それが自分にとって危険かそうでないかが、理屈を通して、なぜという問いを通してわかっている如果孩子は安心できる。

それはことばの意味が分かる前から、生後6か月の時から体に刷り込まれてますから、やっていいことと悪いことの区別はことばの意味のレベルではなく、すべての人間は体で覚えていくんです。憲法第19条に「思想良心の自由は絶対に侵してはならない」とありますが、体に刷り込まれたことを学校に入ってから、道徳の時間にやるべきことなんだとなると、人間そのものが壊れちゃうんですよ。だから学校における道徳教育というものは、最大の人権侵害だというのは、そこに根本があるからです。

3歳児が「なぜ」と聞いて、ニコニコしながら説明してくれる大人に囲まれていたら、その子はなぜという問いを出すことに恐怖

を抱かなくなります。それが楽しいことで面白いことだということを知っていけば、そういう子がものを考える子どもになっていくのです。

昔話の「なぜ？」

日本の社会は、この問題はなぜなんだろうと、原因と結果を明らかにする合理的思考で考えようとすると、難しいことを言っただか理屈っぽいと言われてしまう。それはこの国の言語環境がとても貧しいからです。子どものなぜという問いに、周りの大人がちゃんと答えてくれなかった人が多いから、なぜという問いを出してきちんと物を考えるような人を理屈っぽくて嫌な人だという。

義務教育が9年間保障されているのは、子どもたちのなぜという問いに、大人が説明責任を果たす義務があるんだということです。子どもの権利条約で一番基本的な考え方はここなのです。応答責任、子どもからの「なぜ」に、大人はことばをつくって語る責任があるんです。大事なことは私たちが接してきた物語の世界、お話の世界、文字で書かれると文学となりますが、この世界は子ども達のなぜという問いを誘発しつつ、同時にそれにふたをする両方の役割を果たしています。

世界各地域に伝わっていた昔話は、大正期以降の児童文学を経て安全なものにされてしまったのです。もともと昔話はものすごく残酷で怖いんです。でも怖い話はとても大事な経験をさせる話でもあるんですよ。いま残っている話でもよくよく考えてみると

怖いでしょう。例えば「昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。おばあさんが川で洗濯をしていると、川上から大きな桃がどんぶらこと流れてきました」。その桃はどこから流れてきたの？ なっていた桃の木はどこにあるの？ 聞き出したら大変な話ですよ。

柳田國男が開いた民俗学の最大の成果の一つである『桃太郎の母』という分厚い研究書にならざるを得ません。日本列島のような島国には、最初の社会を切り拓いた人は流れて来たという瓜子姫伝説があるでしょう。そういう流れてくる子どもの伝説のおもとをたどっていくと、中国の桃源郷にいきつく。そういうすごい話になります。おじいさんは山に芝刈りに、これは子どもが変だと思ったら大変な話ですよ。なぜ田んぼじゃなくて山に芝刈りに？ ごはんはどうするの？ など聞かれたら大変なことになってしまう。

かぐや姫が降りてくるのも竹取の翁^{おきな}でしょう。お米を作っている天皇制の律令の公地公田の公民じゃない。その周りの竹やぶで農業用の用具を作っている竹細工職人のところに、月で罪を犯したかぐや姫が降りてくるということ自体、大変な話でしょう。かぐや姫は天皇から結婚を申し込まれても断りました。かぐや姫は反天皇制小説だ、とこういう話になります。そういう話をすれば高校生だって喜んで聞くのに、そこはタブーになっている。かぐや姫は竹取の翁に不老長寿の薬を残して行きます。秦^{しん}の始皇帝でも、地球上の権力者が誰もが手にすることが出

来なかった薬です。竹取の翁はお前がいなくなったこの世で生き長らえても仕方がないと、それを捨ててしまう。不老長寿の薬を捨てた山を不死の山＝富士の山というようになりました。だから竹取物語の頃の富士山はまだ活火山だということがわかった。

ウラシマ伝説はいま浦島太郎と言っていますが、太郎が“長男”になったのは江戸時代からです。室町時代の後期から江戸時代の始めにかけて出来た御伽草子^{おとぎぞうし}という書物の中で、太郎という長男名になったのです。ウラシマ伝説は万葉の時代からあります。浦島が助けた亀が乙姫様に変身するんです。これは鶴の恩返しでも助けた鶴がそのまま美女に変身します。つまり「なぜ」と子どもに問われなければ、「浦島はかわいそうに思って亀を助けました。子ども達がなかなかいじめを止めないのでお金をあげました」。そこで子どもになぜと聞かれたら大変でしょう。

でもこの尋問は重要です。浦島太郎は獵師です。昨日まで鯛やひらめを獲って殺して、それを商品にして金を儲けていたんですよ。何でその日だけ亀に慈悲心を抱いたんですか。助けられた亀はお礼をするために竜宮城へ招いた。乙姫様それでいいんですか。浦島太郎が助けたのは亀一匹だけです。なぜという問いかけと、浦島太郎のメダシメダシの話の背後には、人間社会と乙姫社会の戦争と暴力の問題が隠されているということですよ。

桃太郎も直接暴力です。お分かりでしょう。どのくらいお話の数をパターンとして知

っているだけ、子どもがピンチに陥った時、そこから抜け出せるかは様ざまな方策の豊かさがそこで決まってしまう。浦島太郎しか知らない、桃太郎しか知らない子どもは悲惨でしょう。最期は鬼退治ですよ。だって桃太郎は軍国主義と日本の植民地時代を肯定するお話としても戦争と関わっているのですから。つまりこのような物語の力を通して、いろんなパターンを知っていれば、なぜという問いを立てるのが怖くなくなるでしょう。今日は浦島太郎でいってみよう、今日はかぐや姫でいってみよう、そういう選択肢がいっぱいあるほどものを考えるんです。

日常の中の「なぜ」を問おう

人間の脳は動物の脳で、大脳皮質がかぶさっています。記憶というのは動物の脳のほうにあり、これは感情と深く結びついています。ですからある問題についての記憶が動物の脳の感情的なレベルで処理されていると、その問題に関しては原因と結果をはっきりさせた冷静な判断を人間として出来なくなってしまう。ゼロ歳児状態、パニック状態にさせられてしまう。3歳児以降のなぜという問いが立てられなくなってしまうのです。

ここを権力はマスメディアを操作しながら、私たちの意識と感情を操っているんです。詳しくは筑摩新書で『心脳コントロール社会』、心と脳をコントロールする社会という本を書きました。2005年の小泉選挙はどれだけその手法を使ったかということを明らかにしていますので読んでいただきたいと思い

ます。

哺乳類の場合は弱肉強食の世界で生きています。自分と違う種が目の前に出てきたら、こいつは自分より強いかわ弱いかわ、ただちに判断しなければいけない。強いと判断したら一気にその場所から逃げ出す。弱いと判断したら、怒り狂う感情を凝縮させて、相手が逃げる前に攻撃する。だから恐怖と怒り、逃亡と攻撃、これで哺乳類の世界は成り立っているんです。人間がこの状態に落とされこめられると、合理的な判断が出来なくなる。北朝鮮問題というのはそういうふうに使われ続けているでしょう。2008年の読売新聞の世論調査では憲法を変えないほうがいいと出ていますが、しかし今年の7月に何が起こりましたか。

7月5日、オバマ大統領がプラハで核廃絶の演説をしました。プラハは日本より12時間遅れています。その午前中に北朝鮮がロケットを発射したために、オバマ大統領は先を越されて、それで北朝鮮を批判する文言をこの演説に入れたから、北朝鮮はそのあと第二次核実験にまで行って、危機が高まったでしょう。この危機を無くすために、8月4日にオバマ大統領はクリントン元大統領を特使として送ったんですよ。その因果関係を分らないとだめなわけです。

8月6日ヒロシマの日、日本中、酒井法子はどこにいたかという記事で埋められていました。これで完全にナガサキは消されていってしまったでしょう。オバマ大統領の演説をふまえて、広島市長も長崎市長も核廃絶を具体的に現実的に積み上げていこうと運動をよびか

ける宣言は、完全に日本のテレビからかき消されたわけです。

私たちが大事なものは、いま何が起きているのか、なぜこういう事態になっているのか、過去の歴史と照合しながら冷静な判断をして、その中における権力のごまかしをしっかりと抜き取っていくことが必要です。日常の中のなぜを問えば、それがおかしいというものは必ずあります。いま私たちは「なぜ」と問えば、安全保障問題、憲法問題、外交問題

など、権力の中核は一番大事な政治の問題を押し隠せない状態になっています。

みなさんの草の根で、周りの方と立ち話でもいい、お茶のみ話しでもいい、おかしいことがあったらなぜだろうと、子どもたちのことも含めて考えていって、この運動を引き継ぎましょう。ありがとうございました。

(まとめ・文責／竹森絹子)

プロフィール

こもり よういち 1953 年生まれ。東京大学大学院教授(日本近代文学)。「九条の会」事務局長。母は詩人の小森香子さん(♪「青い空は」の作詞者)。「九条の会」は2004年に井上ひさしさん、梅原猛さん、大江健三郎さん、奥平康弘さん、小田実さん、加藤周一さん、澤地久枝さん、鶴見俊輔さん、三木睦子さんの9名が呼びかけ、「憲法9条を守る」という一点で、すべての人が力を合わせようと発足しました。現在では全国に7000以上の草の根の運動による「九条の会」が立ち上がり、新座など、各地域で活動しています。著書『漱石を読みなおす』『天皇の玉音放送』『ことばの力 平和の力—近代日本文学と日本国憲法』『心脳コントロール社会』ほか



♪青い空は青いままで、子どもらに伝えたい♪